

阪神大震災 そのとき私は(1995年3月号掲載・樋口 正勝)



私は小学校3年のとき、福井地震を経験したが、この時をはるかに超えた未曾有の大地震が阪神大震災だ。ドーンとうなる直下型で寝ていた私は布団から50センチ程放り上げられ「あー地震やあ」と直感した。その後、今度は大きく左右上下の揺れを体を感じた。「自分の家族も家も皆終わりだなあ」

数10秒後、地震は止み、家族も皆無事なのを確かめて「ほっと」ひと安心した。

すぐに単車に乗って妙法寺を経て名倉町を通過して長田方面を見ると一面街が火の海で、その被害の大きさから、これは大きな災害だなあと思った。とっさに私は、このときこそ冷静に対応し、この災害に立ち向かわなければならないと単車のアクセルを握りしめ、全速力で生田消防署へ。

地震発生と同時に職員全員非常招集、消防署玄関は物々しい態勢で救助された人々が布団をかぶって震えている姿、目の前には今にも倒壊しそうなビル、NHKの前には無惨に倒れた電柱、まるで、この世の地獄絵化した街・・・。

息つく暇もなく火災現場まで走っていくと、3 台の消防自動車が放水中、しかし、水利は地震のため消火栓は使用できず、火災現場から 200 メートル離れたプールを使用、消防隊員 14 名、消防車 3 台(内 1 台は梯子車)この消防隊は非常招集で集まった職員で編成された増強隊だ。徒歩や自転車で集まった職員で、中には三田から 1 時間かかって単車で駆けつけた職員もいた。火災は 3 階から 4 階に延焼中であり、避難した 5 階の住人から「私の家を守ってください」と懇願された。しかし、機関員の岩佐士長に「プールの水はどの位あるか」と聞くとあと 50 センチ位だと言う。住人から「消防さん頼りにしてまっせ！」「まかせとき」といいながらも不安が一杯の消防活動でした。(この規模の火災なら通常は 15 台の消防自動車が出動しているはずであった。)

放水時間 5 時間 30 分、午後 1 時鎮火、消防自動車 3 台、その後の応援隊はなし、プールの水は残り後僅か 5 センチ、櫛橋中隊長の指揮のもと、4 階で頑張ってくれた大槻小隊、3 階を担当した鳥井小隊、梯子隊の坂本土長、そして遠方から単車で駆けつけた前田主任、機関を担当してくれた岩佐、名越士長・・・私も消防暦 37 年、鎮火したときに被災家族、野次馬、北野小学校へ避難する住民の方々、そして近隣の人々とともに喜び、ほっとした消防隊員のあの時の顔は、いまだに忘れることができない。

今後このような災害に立ち向かうためには、街には水利(飲料水を含む)や避難場所など十分に確保できるような安全な街をつくるように努めなければならない。今こそ経験した消防職員がリーダーとなって市民とともに災害のない街づくりをするように知恵をしぼらなければならない。